

小児科

1. スタッフ（平成26年4月1日現在）

			(専門)
科 長 (教 授)	山形 崇倫	神経	
副 科 長 (教 授)	小坂 仁	神経	
外来 医長 (講 師)	金井 孝裕	腎臓	
病棟医長心得 (助 教)	伊東 岳峰	腎臓	
病棟 医長 (講 師)	門田 行史	神経	
医 員 (教 授)	杉江 秀夫	神経・代謝 内分泌	
(学内教授)	森本 哲	血液・腫瘍・ 免疫	
(准 教 授)	河野 由美	新生児	
	南 孝臣	循環器	
	熊谷 秀規	消化器・肝臓	
(講 師)	矢田ゆかり	新生児	
	小池 泰敬	新生児	
(学内講師)	佐藤 智幸	循環器	
	横山 孝二	消化器・肝臓	
(助 教)	齋藤 貴志	腎臓	
	青柳 順	腎臓	
	長嶋 雅子	神経	
	早瀬 朋美	血液・腫瘍・ 免疫	
	翁 由紀子	血液・腫瘍・ 免疫	
	小島 華林	神経	
	松本 歩	神経	
病 院 助 教	乗島 真理	神経	
	佐藤 優子	喘息・ アレルギー	
	俣野 美雪	新生児	
	別井 広幸	腎臓	
	横溝亜希子	循環器	
	川原 勇太	血液	
	下澤 弘憲	新生児	
	宮内 彰彦	神経	
	岡 健介	循環器	
	島村 若通		
	中野 祐子	神経	
	新島 瞳	血液	
	湯田 貴江		
	植田 綾子		
	鈴木 峻		
	古井 貞浩		
シニアレジデント	14名		

2. 診療科の特徴

当科は小児の総合診療及び多岐にわたる専門診療を担当している。総合診療部の担当する外来のほかに、神経、心臓、肝消化器、腎臓、代謝・内分泌、血液・腫瘍、膠原病、喘息・アレルギー、遺伝、新生児、心理の各専門外来があり、こども医療センター内で他科の専門外来とも連携をとって診療にあたっている。また、救急医療では地域医療機関と連携して、三次救急医療の重要な役割を果たしている。

病棟は急性期病棟、慢性期病棟、周産期センター新生児集中治療部門にわかれ、それぞれ38床、38床、36床の計112床のベッド数を有している。必要に応じて小児集中治療室での治療も行う。子どもと家族のニーズに応じた包括的な小児医療と、幅広い分野の専門性の高い検査や治療などの高度な医療を提供している。

・関連領域専門医認定施設

日本小児科学会専門医研修施設
日本小児神経学会専門医研修認定施設
日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医制度認定研修施設
日本超音波医学会認定専門医研修施設
日本てんかん学会専門医認定研修施設
日本小児循環器学会専門医修練施設
日本小児血液・がん専門医研修施設
日本周産期・新生児医学会基幹研修施設
日本腎臓学会研修施設
日本透析医学会認定施設

・認定医

日本小児科学会小児科専門医 山形 崇倫 他50名
PALS Provider 門田 行史 他10名
日本小児神経学会認定小児神経科専門医
山形 崇倫 他3名
日本てんかん学会認定臨床指導医
山形 崇倫 他1名
日本人類遺伝学会臨床遺伝指導医・指導責任医
山形 崇倫
日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医
杉江 秀夫 他1名
日本小児循環器学会専門医 南 孝臣 他4名
日本心臓病学会FJCC 白石裕比湖
日本臨床腎移植学会認定医 金井 孝裕
日本腎臓学会腎臓専門医 金井 孝裕
日本透析医学会専門医 金井 孝裕
日本消化管学会 胃腸科認定医 熊谷 秀規

- 日本周産期・新生児医学会指導医
矢田ゆかり
- 日本周産期・新生児医学会専門医
小池 泰敬
- 日本周産期・新生児医学会新生児蘇生法「専門」コース
インストラクター 矢田ゆかり 他3名
- 日本周産期・新生児医学会専門医暫定指導医
本間 洋子
- BLS Provider 本間 洋子
- 日本血液学会指導医 森本 哲
- 日本血液学会専門医 森本 哲
- 日本小児血液・がん学会 小児血液・がん暫定指導医
森本 哲
- 日本造血細胞移植学会認定医 森本 哲
- 日本がん治療認定医機構暫定教育医
郡司 勇治 他1名
- 日本がん治療認定医機構 がん治療認定医
中村 幸恵 他1名
- ICD制度協議会インフェクションコントロールドクター
柏井 良文 他1名
- 日本アレルギー学会アレルギー専門医
佐藤 優子
- 日本医師会認定産業医 南 孝臣 他4名

3. 診療実績・クリニカルインディケーター

とちぎ子ども医療センターの1年間の小児科総合診療部、専門診療部および入院診療実績について報告する。なお周産期母子総合医療センターのNICUについても一部併記する。

3-1. 外来診療

1) 新来患者数・再来患者数・紹介率

新来患者数	3,609人
再来患者数	42,360人
外来患者延べ数	45,969人
紹介率	34.1%

2) 小児科総合診療部外来

医師：山形 崇倫(部科長・兼)、小坂 仁(副科長・兼)、杉江 秀夫(兼)、森本 哲(兼)、南 孝臣(兼)、金井 孝裕(外来医長・兼)、伊東 岳峰(兼)、斉藤 貴志(兼)、佐藤 優子(兼)、石井 朋之(兼)、小熊 真紀子(兼)、中村 幸恵(兼)

診療実績：

総合診療部では、午前中の総合診療部外来と午後の急患対応を行っている。小児科専門医がそれぞれの専門診療部と兼務で診療を行っている。原則として初診は紹介受診のみとしているが、直接受診される場合も多い。発熱、けいれん、咳、喘鳴、腹痛、頭痛、嘔吐・下痢、な

どの急性症状に加えて、成長発達上の問題、不登校、なども多い傾向にある。基礎疾患を有し、各専門外来に通院している小児の急性症状にも対応している。小児科の診療では常に総合的判断を必要とするため、総合診療部で問題を把握し、適切な初期治療、あるいは検査を実施し、必要に応じて、病棟や各専門診療部に振り分ける場合と、しばらく総合診療部外来で診療後、地域かかりつけ医にお戻りする場合がある。全領域にわたる能力を必要とするため、ベテランの小児科専門医が担当している。年間約12,000人が受診した。月別患者数は急性疾患の流行にも左右されるが、夏季には学校検診の二次精密検査などで外来受診者が増える傾向にある。

2013年、月別患者数：()内は2012年

	1月	2月	3月	4月
合計患者数	905 (805)	885 (805)	1076(968)	981 (742)
	5月	6月	7月	8月
合計患者数	994 (853)	901 (790)	1133(929)	1100 (1244)
	9月	10月	11月	12月
合計患者数	962 (933)	993 (1170)	963 (1081)	882 (1011)

合計患者数 11,775 (10,331)人

3) 小児神経外来

医師：山形 崇倫、小坂 仁、杉江 秀夫、森 雅人、門田 行史、長嶋 雅子、池田 尚広、宮内 彰彦、石井 朋之

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
764	715	887	850	852	741
7月	8月	9月	10月	11月	12月
916	910	791	854	777	714

年間総受診数9,771人

主な診療対象：

複数の疾患を持つ例が多いため、主要疾患の1か月受診者数の概数を記載する。てんかん 400-500人、脳性麻痺や脳炎等による痙性麻痺 100-150人、自閉性障害、知的障害、学習障害や注意欠陥多動性障害 350-400人、先天代謝異常症 約20人、染色体異常や中枢神経形成異常 約80人、神経皮膚症候群 20-30人、筋ジストロフィー、重症筋無力症などの神経筋疾患 30-40人、白質脳症、脊髄小脳変性症などの神経変性疾患 4-5人、チック障害、吃音、頭痛等 40-50人であった。この他、人工呼吸器外来において、35人の在宅人工呼吸器患者を診療している。

4) 遺伝外来

医師：野崎 靖之

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
17	21	31	23	23	25
7月	8月	9月	10月	11月	12月
24	30	28	30	36	27

年間総受診数 315人

主な診療対象：

Down症候群、染色体異常症候群、Marfan症候群、Williams症候群など先天奇形症候群、なお、染色体異常、遺伝性疾患は、神経外来に通院している患者も多い。

5) 小児循環器外来

医師：南 孝臣、片岡 功一、佐藤 智幸、横溝 亜希子、白石 裕比湖、菊池 豊

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
195	189	267	304	305	298
7月	8月	9月	10月	11月	12月
326	314	319	338	328	307

年間総受診数 3,490人

主な診療対象：

先天性心疾患（心室中隔欠損症、心房中隔欠損症、完全大血管転位症、Fallot 四徴症、肺動脈閉鎖症など）の術前と術後、川崎病、不整脈、心筋症、心雑音の精査などを中心に外来診療している。

6) 小児腎臓外来

医師：金井 孝裕、伊東 岳峰、小高 淳、齋藤 貴志、青柳 順、別井 広幸

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
146	160	195	203	158	146
7月	8月	9月	10月	11月	12月
183	206	167	169	194	174

年間総受診数 2,101人

主な診療対象：

小児特発性ステロイド感受性ネフローゼ症候群、40～50名；IgA腎症、30～40名；膜性増殖性糸球体腎炎、5名；ループス腎炎、5名；巣状糸球体硬化症、5～10名；膜性腎症、3～5名；Alport症候群、5名；腹膜透析、4名；その他、低形成腎、嚢胞腎、尿細管アシドーシス、慢性腎不全（腎移植後の症例を含む）などを診療している。

外来の特色：

急性血液浄化療法から、維持透析療法・生体腎移植まで、ほぼ小児腎疾患のすべてを守備範囲としている。また、他の小児専門診療科からの依頼を受けて、血漿交換療法や、G-CAPなどの体外循環療法も行っている。院外との連携では県内はもとより、群馬・埼玉・茨城・福

島などからも、紹介を受けている。

7) 小児代謝・内分泌外来

医師：杉江 秀夫、中山 佐与、山崎 雅世

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
182	170	198	226	152	143
7月	8月	9月	10月	11月	12月
195	189	135	175	158	169

年間総受診数 2,092人

主な診療対象：

新生児マススクリーニング検査の2次精密検査、先天代謝異常症（OTC欠損症、脂肪酸代謝異常症、糖原病、代謝性ミオパチーなど）、高コレステロール血症、糖尿病などの代謝性疾患、および成長ホルモン分泌不全性低身長、副腎過形成、甲状腺機能低下症、バセドウ病、思春期早発症などの内分泌疾患が主体である。

また下垂体近傍の腫瘍摘除、あるいは放射線治療後の内分泌障害にも対応している。

8) 小児消化器・肝臓外来

医師：桃谷 孝之、熊谷 秀規、横山 孝二

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
110	120	136	138	150	113
7月	8月	9月	10月	11月	12月
124	135	116	117	117	124

年間総受診数 1,500人

主な診療対象疾患：

炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎、クローン病、腸管ペーチェット病）、胃・十二指腸潰瘍、ヘリコバクターピロリ感染症、粘膜脱症候群、若年性ポリープ、機能性消化管障害（機能性ディスペプシア、過敏性腸症候群など）、B型・C型ウイルス性肝炎（キャリア、インターフェロン治療、母子感染予防措置）、胆道閉鎖症（術後を含む）、肝内胆汁うっ滞症（Alagille症候群、原発性硬化性胆管炎、新生児肝炎など）、肝硬変（胆道閉鎖症術後、COACH症候群など）、慢性肝炎（自己免疫性肝炎、輸血後肝炎など）、急性肝炎（CMV肝炎、EBV肝炎、TTV肝炎など）、非アルコール性脂肪肝、肥満症、代謝性肝疾患（Wilson病、NICCDなど）、体質性黄疸、胆石症、急性膵炎、異所性膵などの診断や内科的治療を行っている。急性虫垂炎、Hirschsprung病、メッケル憩室、肥厚性幽門狭窄症、胃食道逆流症、胆道閉鎖症などの外科的疾患、経皮的または腹腔鏡下肝生検、上部・下部消化管内視鏡および小腸内視鏡検査や内視鏡治療に関しては、麻酔科、小児外科、移植外科、消化器内科と連携を取りながら診療を行った。

9) 新生児フォローアップ・シナジス外来

医師：河野 由美、矢田 ゆかり、小池 泰敬、

俣野 美雪、鈴木 由芽、本間 洋子

診療実績：

新生児フォローアップ

1月	2月	3月	4月	5月	6月
158	164	181	149	158	154
7月	8月	9月	10月	11月	12月
168	211	178	188	174	190

年間総受診数 2,073人

シナジス外来

1月	2月	3月	4月	5月	6月
36	52	54	3	—	—
7月	8月	9月	10月	11月	12月
—	—	36	32	39	31

年間総受診数 283人

主な診療対象：

新生児フォローアップ外来は、NICU退院児を対象として、退院後2週間から小学校3年生まで長期フォローアップを行っている。診療内容は成長・発達の評価とともに合併症の治療や精査、必要な養育支援である。気管切開、在宅酸素療法や経管栄養などの在宅医療を必要とする児も多い。外科系診療科、心理面接・心理検査、リハビリテーション部門と連携して包括的な診療を行っている。新生児難聴スクリーニングの精査・フォローも行っている。新生児外来の他に冬季に行われるRSV重症化予防のために別枠で設置したシナジス外来でもパピズマブを接種した。

10) 小児血液・腫瘍外来

医師：森本 哲、柏井 良文、早瀬 朋美、

翁 由紀子、川原 勇太

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
159	132	169	173	115	116
7月	8月	9月	10月	11月	12月
173	190	144	159	129	164

年間総受診数 1,823人（血液長期フォローアップ外来を含む）

主な診療対象：

急性リンパ性白血病（ALL）や急性骨髄性白血病（AML）、若年性骨髄単球性白血病、悪性リンパ腫、慢性骨髄性白血病などの血液腫瘍疾患、神経芽細胞腫（NBoma）や腎芽腫、肝芽腫、網膜芽腫、脳腫瘍などの悪性固形腫瘍、ランゲルハンス細胞組織球症（LCH）や血球貪食性リンパ組織球症（HLH）の組織球症、血友病や特発性血小板減少性紫斑病、遺伝性血栓症などの凝固系疾患、再生不良性貧血や遺伝性球状赤血球症、サラセミアなどの赤血球系疾患、慢性良性好中球減少症や重症複合型免疫不全、慢性GVHDなどの白血球・免疫疾

患。

2013年の新規腫瘍性疾患・組織球症は、ALL 3例、悪性リンパ腫 1例、NBoma 3例、腎腫瘍 1例、肝芽腫 1例、脳腫瘍 4例、HLH 2例であった。

*患者さんとその家族のQOL向上を目指し、医師・看護師・心理士などの多種職による「小児緩和ケアチーム」のカンファランスを月2回定期に開催した。

*外来化学療法を開始した(2013年7月～加算を算定)。

11) 喘息・アレルギー外来

医師：佐藤 優子、熊谷 秀規

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
69	79	80	101	78	92
7月	8月	9月	10月	11月	12月
112	92	64	112	109	113

年間受診数 1,101人

主な診療対象疾患：

気管支喘息、食物アレルギー、アナフィラキシー、薬物アレルギー、アトピー性皮膚炎、化学物質過敏症など

1, 気管支喘息、乳児喘息、運動誘発喘息
発作重症度としては、中等症および重症持続型の患児が大半を占める。心疾患や神経疾患など、基礎疾患をもつ児も多く、他の専門外来と連携をとり診療している。気管支喘息を基礎疾患にもつ患児の術前評価も行っている。

薬物療法として発作重症度にあわせた早期からの吸入ステロイド薬導入や、喘息教育などを行っている。

2, 食物アレルギー

近年増加傾向にある食物アレルギー児に対して、原因食物の特定や除去食導入を行い、栄養指導や薬物療法、皮膚検査、耐性獲得確認のための食物負荷試験を施行している。

食物アレルギーのある児に対して麻疹風疹ワクチンやインフルエンザワクチンの接種を随時施行している。アナフィラキシーに対する急性期の治療を行い、再発予防の指導や、学校を含めた諸機関との連携、緊急時使用薬（エピペン[®]）導入等を行っている。

12) 小児免疫外来

医師：森本 哲、川原 勇太

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
57	47	76	57	57	55
7月	8月	9月	10月	11月	12月
53	99	58	47	69	88

年間総受診者数 763人

主な診療対象：

若年性特発性関節炎（JIA）、全身性エリテマトーデス（SLE）、シェーグレン症候群（SJS）、若年性皮膚筋

炎 (JDM) など。

2013年の主な新規症例は、JIA 9例、SLE 3例、MCTD 1例、抗リン脂質抗体症候群 1例、結節性多発性動脈炎 1例であった。

13) 胎児心エコー外来

医師：片岡 功一

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
4	4	6	4	5	5
7月	8月	9月	10月	11月	12月
9	4	5	2	3	6

年間総受診数 57人

主な診療対象：

胎児の左心低形成症候群、三尖弁閉鎖症、両大血管右室起始症、Fallot 四徴症、完全大血管転位症、多脾症候群、心臓腫瘍、不整脈など。

その他：院内産科あるいは産科開業医から紹介された、胎児に先天性心疾患や不整脈を持つ妊婦において、胎児心エコー図検査による出生前診断を実施した。

14) 1ヵ月健診

乳児健診は原則当院産科から退院した生後1ヶ月児の健診を行っている。また新生児マススクリーニングの結果を外来で家族に説明している。

()内は2012年

1月	2月	3月	4月	5月	6月
99 (61)	65 (75)	90 (80)	90 (60)	69 (83)	67 (69)
7月	8月	9月	10月	11月	12月
107 (86)	80 (76)	75 (76)	80 (101)	78 (72)	63 (78)

年間総受診数 963 (917)人

15) 夜間・休日診療

診療実績：夜間、休日に受診し、小児科医が診療した患者数

()内は2012年

1月	2月	3月	4月	5月	6月
369(326)	274(299)	342(310)	304(318)	392(350)	298(293)
7月	8月	9月	10月	11月	12月
335(291)	324(253)	278(295)	306(365)	322(308)	416(354)

年間総数 4,170 (3,760)人

16) 心理検査・心理面接

臨床心理士：星子 真美、氏家 莉沙、村上 瑠璃、田所 まり子

診療実績：

心理検査件数

*総検査数(うち新生児検査)

1月	2月	3月	4月	5月	6月
35 (16)	27 (14)	41 (15)	38 (13)	30 (13)	37 (17)
7月	8月	9月	10月	11月	12月
50 (19)	53 (22)	39 (17)	50 (22)	48 (20)	39 (18)

年間総検査件数 487人

心理面接件数

*総面接数(うち新規面接)

1月	2月	3月	4月	5月	6月
98 (6)	80 (6)	114 (9)	97 (7)	83 (3)	79 (7)
7月	8月	9月	10月	11月	12月
99 (6)	91 (5)	83 (5)	107 (6)	89 (3)	99 (5)

年間総面接件数 1,119人

主な対象：

検査内容は、神経外来からの知能・発達検査、新生児外来からの極低出生体重児のフォローアップのための発達検査の依頼が主であった。心理面接は、心身症、不登校などの適応障害、発達障害児の二次障害への対応等の相談が多かった。依頼に応じて、入院している患児の心理面のケアにも携わった。患児に対しては、言語面接、プレイセラピー、動作法などを行っており、家族の相談にも併せてのっている。

3-2. 小児科入院診療

小児科は主として2A病棟と4A病棟で診療し、重症児については小児集中治療室(PICU)で集中治療を行っている。また、総合周産期母子医療センター(NICU、GCU)で新生児の診療を行っている。

1) 小児科の月別新入院患者数(総合周産期母子医療センターを除く)

1月	2月	3月	4月	5月	6月
123	119	138	137	127	124
7月	8月	9月	10月	11月	12月
143	132	128	144	145	146

総計年間入院患者数 1,606人

2) 入院患者の疾患別内訳(人数)；小児科退院患者大分類別疾病統計(DPCコードベース、総合周産期母子医療センターを除く)

章	章名称	ICD	件数		在院日数		平均在院日数
1	感染症及び寄生虫症	A00-B99	65	4.6%	567	1.9%	8.7
2	新生物	C00-D48	70	4.9%	3772	12.8%	53.9
3	血液及び造血器の疾患並びに免疫機構の障害	D50-D89	42	3.0%	587	2.0%	14.0

4	内分泌、栄養及び代謝疾患	E00-E90	41	2.9%	489	1.7%	11.9
5	精神及び行動の障害	F00-F99	8	0.6%	73	0.2%	9.1
6	神経系の疾患	G00-G99	112	7.9%	1867	6.3%	16.7
7	眼及び付属器の疾患	H00-H59	1	0.1%	87	0.3%	87.0
8	耳及び乳様突起の疾患	H60-H95	1	0.1%	7	0.0%	7.0
9	循環器系の疾患	I00-I99	35	2.5%	641	2.2%	18.3
10	呼吸器系の疾患	J00-J99	288	20.3%	5012	17.0%	17.4
11	消化器系の疾患	K00-K93	52	3.7%	898	3.0%	17.2
12	皮膚及び皮下組織の疾患	L00-L99	10	0.7%	103	0.3%	10.3
13	筋骨格系及び結合組織の疾患	M00-M99	46	3.2%	506	1.7%	11.0
14	腎尿路生殖器系の疾患	N00-N99	64	4.5%	1138	3.9%	17.7
16	周産期に発生した病態	P00-P96	323	22.7%	9259	31.4%	28.6
17	先天奇形、変形及び染色体異常	Q00-Q99	180	12.7%	3630	12.3%	20.1
18	症状、徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの	R00-R99	66	4.6%	717	2.4%	10.8
19	損傷、中毒及びその他の外因の影響	S00-T98	13	0.9%	94	0.3%	7.23
20	傷病及び死亡の外因	V00-Y98	0	0.0%	0	0.0%	0.0
21	健康状態に影響を及ぼす要因及び保健サービスの利用	Z00-Z99	0	0.0%	0	0.0%	0.0
22	特殊目的用コード	U00-U99	3	0.2%	16	0.1%	5.3
総計			1420		29463		20.75

3) 新生児集中治療部 (NICU) の入院実績

1) 年間入院患者数

487名 (再転入12名を除く)。院内出生434名 (母体外来観察例79名、母体搬送37名、母体外来紹介318名)、院外出生53名 (病院等からの搬送50名、自宅出生等3名)

2) 人工呼吸器管理数・率

146/487例、30.0%

3) 生存率・死亡数など

GA (W)	入院	生存	死亡	生存率 (%)
22	0	0	0	-
23	3	3	0	100.0
24	2	1	1	50.0
25	2	2	0	100.0
26	6	4	2	66.7
27	2	2	0	100.0
28	7	6	1	85.7
29	9	8	1	88.9

30	8	8	0	100.0
31	9	9	0	100.0
32	23	23	0	100.0
33	13	13	0	100.0
34	35	35	0	100.0
35	41	41	0	100.0
36	52	50	2	96.2
37以上	275	271	4	98.5
計	487	476	11	97.7

BW (g)	入院	生存	死亡	生存率 (%)
<500	0	0	0	-
<750	7	5	2	71.4
<1000	11	9	2	81.8
<1250	15	15	0	100.0
<1500	26	24	2	92.3
<1750	39	39	0	100.0
<2000	51	50	1	98.0
<2500	102	99	3	97.1
2500以上	236	235	1	99.6
計	487	476	11	97.7

年間死亡数11名。

4) 死亡症例内訳

- 在胎37週 18-trisomy、VSD、低出生体重児
- 在胎37週 18-trisomy、臍帯ヘルニア、DORV、CoA、極低出生体重児
- 在胎26週 超低出生体重児、先天性喉頭閉鎖
- 在胎26週 超低出生体重児、肺低形成
- 在胎29週 非免疫性胎児水腫、肺分画証、心不全
- 在胎28週 超低出生体重児、腎無形成、肺低形成、肺高血圧症
- 在胎36週 VACTER連合、両側腎無形成、食道閉鎖、鎖肛、十二指腸閉鎖、ファロー四徴
- 在胎37週 多のう胞性腎乳幼児型、肺低形成
- 在胎36週 先天性多発関節拘縮、多発翼状片
- 在胎24週 新生児仮死、臍帯ヘルニア、心不全
- 在胎38週 18-trisomy、VSD、ASD、CoA、極低出生体重児

5) 先天性心疾患入院例

有意な血行動態異常を呈する中等症・重症例34例。そのうち胎児診断18例、PICU転科・手術 14例、NICU内死亡2例。

6) 多胎入院数

108名。

7) 外科症例 (手術例のみ)

21例、光凝固術5例

8) 逆搬送

23例。うち、状態安定後、搬送元の病院等に転院したものの23例。

3-3. 主な検査・特殊治療

1) 心臓カテーテル検査

心臓カテーテル検査の総数は134件（うち治療56件）であった。対象疾患は、心室中隔欠損23件、心房中隔欠損18件、Fallot四徴症／両大血管右室起始症26件、房室中隔欠損症11件、完全大血管転位 9 件、動脈管開存症 5 件、三尖弁閉鎖 5 件、左心低形成症候群 4 件、川崎病 8 件、その他（単心室、純型肺動脈閉鎖、大動脈弓離断／縮窄、大動脈弁狭窄、肺動脈弁狭窄など）25件であった。治療56件の内訳は、バルン血管形成術23件、血管コイル塞栓術 7 件、バルン弁形成術 6 件、心房中隔欠損閉鎖術（ASO）11件、動脈管閉鎖術 5 件（ADD 3 件）、心房中隔裂開術 4 件であった。

2) 腎生検

2013年に、22件の腎生検を行った（開放腎生検を含む）。

3) 消化器・肝臓系検査

検査実績：

A) 消化管系		件数		B) 肝・胆道系		件数	
上部消化管内視鏡検査	8	腹腔鏡下肝生検	1	経皮肝生検	3		
下部消化管内視鏡検査	17						
小腸内視鏡検査							
ダブルバルーン法	10						
カプセル内視鏡	3						

4) 造血細胞移植

2013年に造血細胞移植を9回行った。内訳は、AML 2回（HLA半合致血縁）、CAEBV 1回（非血縁骨髄）、MDS 2回（非血縁骨髄、HLA半合致血縁）、副腎白質ジストロフィー 1回（非血縁臍帯血）、JMML 1回（HLA一致同胞）、X-SCID 1回（非血縁臍帯血）、Ewing腫瘍 1回（自家末梢血）であった。

3-4. 小児科カンファレンス

毎週月曜日、火曜日、水曜日、金曜日の朝に新入院患者の紹介と討議、水曜午後の教授回診で入院患者の病状報告と討議を行った。

小児科における症例検討会（CC）は毎週木曜日18時からカンファレンス室で入院例を中心に検討した。以下症例検討会のテーマと担当を示す。

日時	テーマ	担当
1月10日	当科における炎症性腸疾患のまとめ 非典型例の検討	木村、今川、横山
1月24日	A型インフルエンザ罹患3日後に出現した脊髄長大病変	池田、勝部、若林、島村、門田
1月31日	心肺補助装置を使用し、救命し得た劇症型心筋炎の1例	池田（尚）、本橋、英、新島、齋藤（貴）

2月7日	急性散在性脳脊髄炎治療後に視神経炎を発症した小児例	小原、齋藤、山岸、宮内、伊東
2月21日	ファロー四徴症・鎖肛を合併したCHAOSの1例 ～急変時の対応について～	古井、山岸、小森、高田、佐藤
3月7日	桃井真里子先生最終講義	
3月14日	下垂体重複プラス症候群の一例	小林、鈴木（由）
4月11日	副腎白質ジストロフィー ～移植の適応とタイミング～	英、岩下、池田（尚）、八木、宮内
4月25日	無呼吸発作の1例	和田、宮澤、佐野、石井
5月2日	Stanford留学報告	金井
5月9日	小児脳梗塞の1例	植田、英、池田（尚）
5月23日	Mesoblastic nephromaを発症した極低出生体重児症例	小池
5月30日	急性腎不全を合併した低力価寒冷凝集素症の1例	池田（貴）、齋藤（洋）、別井、伊東
6月6日	閉塞性肥大型心筋症の治療戦略～中隔心筋切除術を要する8歳女児例	谷口（祐）、岡、高田、佐藤（智）、南、宮澤、和田、石井
6月13日	川崎病を契機に診断した免疫不全症の1例	宮澤、佐野、和田、石井
6月27日	慢性ITP：当科の経験と最近の知見	潮谷、新島、八木、川原
7月4日	肝障害の遷延する男児例	齋藤（洋）、池田（貴）、別井、伊東
9月12日	右上下肢不全麻痺・失語で発症した後に精神症状を呈した自己免疫性脳炎の疑いの1例	谷口（祐）、和田、鈴木（悠）、山岸（佑）、小高
9月26日	母親由来のT細胞によるGVHDを合併したX連鎖重症複合型免疫不全症の一例	和田、川原、八木、新島、谷口（祐）、小高、齋藤（洋）、根岸、若林、山岸（佑）
10月3日	続発性Fanconi症候群を発症した21トリソミーの男児	別井、伊東、黒岩、鈴木（悠）、宮澤
10月10日	歩行障害を来した3歳女児	植田、英、池田
10月24日	下血をきたした乳児の一例	宮澤、和田、黒岩、横山、熊谷

10月31日	CRP上昇が遷延している乳児の1例	英、池田（尚）、鈴木（峻）
11月7日	基礎疾患を有する児のリスクマネジメント	中野、齊藤（洋）、長嶋
11月14日	中枢性副腎不全にSIADHを合併した顔面正中奇形の1例	今井、鈴木（由）
12月5日	乳児重症ミオクロニーてんかんの病態治療と最新のトピックス	齊藤（洋）、中野、長嶋
12月19日	2013年後半 まとめの会	

4. 来年の目標・事業計画

とちぎ子ども医療センター小児科は、小児科疾患の診療のみならず、子ども医療センター内、附属病院内のあらゆる診療部門との連携により、小児の全ての疾患領域に対して臨床研究に基づく高度な医療を提供する。次年度の目標として、①小児科専門診療部門各領域における小児高度医療の推進、難治性疾患の治療成績の向上、②重症児、慢性疾患児の診療や小児救急医療における地域医療機関とネットワークの構築、③小児科医育成の継続、を掲げる。